
夢幻図書館行

彩葉 陽文

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢幻図書館行

【Nコード】

N0746Y

【作者名】

彩葉 陽文

【あらすじ】

とてつもなく広い図書館に勤める、司書の少女の小話です。ストーリーは、ほとんどありません。色々と断片的です。超不定期連載です。実はファンタジーです。

カーン、カーン、カーン、カーン……

どこから響いてくる音に何の気無しに、耳を傾ける。

実際に傾けられているのは耳では無く、心のようだ。少女は思う。世界が思いから創られるなんて、果たして馬鹿げた考えなのだろうか？

誰もがどこからか、始まりの前は無で、世界も無から生まれて、生き物が思いから生まれてくるのなら、きっとこの宇宙も人の思いから生まれてきた。

そう考えても少しもおかしなことは無いように思えるのだ。

古ぼけた図書館のカウンター。

少女は一人座り、ぼんやりと心を想いの海に沈める。

適当な思考。理屈にもなっていない、ただの言葉の羅列。もっともらしく聞こえるように、感覚で積み上げていく。

緩やかに流れる、言葉の積み木遊び。

遊びだから、決して本気になって考えているわけではないから、跡には何も残らない。

何も生み出さないし、何も変えることはない。

ただの暇つぶしなのだ。

人はいないわけではない。

数だけで言えば一〇〇人単位で入っているはずだ。だが、図書館はあまりにも広大で、それが徒となつて、閑散とした雰囲気を生み出している。

それはむしろ本を読む環境に適していると言えるのだろうか、そ

れでも少女はしばらく話し掛けてくる者もないと、ふと、寂しく思ったりもするのだ。

「あのお」

カウンターに座り今月の入荷図書目録をぼんやりと眺めながら言葉の積み木遊びに興じていると、遠慮がちな声が響いた。

「はい。なんでしょう?」

久しぶりに聞いた他者の声に、少女は微笑んで応えた。もう、何日も誰とも会話をしていなかったような気がする。

むろん、そんなわけはなく、大げさだ。

本当は今朝、出勤して来た時に何人もの同僚と会話を交わしている。もう三十分もすれば昼休みになり、カウンター当番も変わるの誰かと話すこともあるだろう。だが、こうした『お客様』との会話はどうしてか別格のように感じる。だからこそ、大げさな感覚が事実のように錯覚してしまうのだろう。

「ええと、探しているんですが……」

若い男性は遠慮がちに、本の所在を尋ねてきた。緊張を隠せないでいる様子が少し笑いを誘う。

「はい。そちら本でしたら……」

有名な推理小説の題名だった。

手元にあるコンピュータのキーボードを素早く操作して、本の位置を検索する。簡単に見つかり、場所を教えた。

本の位置なら、お客さんでも扱えるように、図書館内の至る所に検索用のコンピュータ端末が置いてある。だが、たまにコンピュータの苦手なお客さんとかもいて、こうして司書に直接聞きに来るの

だ。

だけれども、この場合は少し違うのかもしれない。

司書との会話自体が目的で、本の場所を訊ねてくる者もいる。

仕事が増えるわけだが、別に嫌な気分はない。

つまり、彼らは自分と話をしたがっているのだ。

何人も押し寄せてくるなんてことがあれば鬱陶しいだけだろうけれども、数人ならば、むしろ自分の人気なんてものを感じ取ることができて、少し気分が良い。

ちやほやされるアイドルの感覚とは、こんなものだろうか、なんて思う。

この男性はその目的で司書と会話するのは初心者だったのだろう。見るからに身体を緊張に強張らせている。

微笑ましく思い、義務ではなくて自然と口元に笑みが浮かぶ。

男性は最後まで照れながら、本棚の影へと隠れるようにして、消えていった。

その図書館は閑散としているように感じられた。

カウンターに長い真っ直ぐの黒髪をした少女が一人、どこことなく眠そうに本を読んでいる。気だるそうながらもページを勧めるペー
スは速く、ひよっとしたら実際に眠いわけではなく、ただ少女の身
についた性質なのかもしれない。かなりの美少女のようだったが、
どうしてか眠そうな表情がこの上なくも似合っていて、それ以外の
表情が想像できなかった。

本が切りの良いところまでいったのか、少女は一つ吐息をついて、
本を閉じた。大きく首を回して体をほぐした後、再び小さく吐息を
つく。手持ち無沙汰なのかやや薄茶色の髪の先を、やはり眠そうな
表情でもてあそび始めた。

本を置くタイミングを計ったかのように、小さな足音が近づいて
きた。

気配に顔を向けると、事務室へと上がる東の階段の方から、綺麗
なブロンドの髪の少女がトレイにカップを乗せて運んでくる所だっ
た。

どこか危なっかしい足取りで、トレイをしつかりと両手で握りな
がらゆつくりと向かってきている。

あまりにもトレイに力が入りすぎていて、逆にぶるぶると震えて
いるように見えた。

運んでくる当人は、カップを零さないように慎重に歩いてきてい
るつもりなのだろうが、あれでは逆効果だ。

微笑ましく感じて、くすりと小さく笑う。

その小さな音が聞こえたわけでもないのだろうが、ブロンドの少
女は顔を上げて、黒髪の少女を見た。

「先輩。コーヒーでも飲みませんか？」

先輩　その言葉に、黒髪の少女はわずかにくすぐったそうに身じろいだ。

「ええ、ユーム」

照れたように笑い、うなずいた。

新入社員が入社してきて、一月が経つ。

はじめての後輩。自分で、たった一人で生活するようになり、仕事をできるようになり、はじめて頼ってくる者。少女は嬉しそうに微笑みかけた。

「ありがとう」

礼を言って、ブロンドの少女、ユームからカップを受け取る。

ゆらゆらと湯気が立ち昇り、暖かそうだ。

「来ませんねえ……」

隣に座り、頬杖を付いてぼやくユームを見て、少女は苦笑する。

「ここは奥だしね。それに、今日は三番にミムリエ先輩がいるから」「そ〜ですよねえ。ミムリエ先輩、美人ですし。人気ありますよね。あたしたちもそれなりに美人だと思っんですけどお」

うそぶくユームに、少女は苦笑するしかない。実際、ユームはかなりの美少女だ。陶磁器のような白い肌に人形のような整った顔立ち、影があり、どこことなく神秘的な空気もまとっている。少女も自

分の容姿にそこそこの自負はあったのだが、正直の所、ユームやミムリ工先輩にはやや劣ると思っていた。

「仕方ないわよ。私たち、まだ若いもんねえ」

実際、少女はまだ十七歳で、ユームも十六歳だ。ミムリ工先輩は今年、確か二十三歳で、少女たちが彼女のような美女と呼ばれるようになるには、まだしばらくの時間が必要だろう。

「そうですね。五年後はあたしたちの時代です」

力強く拳を握りながらうなずくユームに少女は笑いかけた。

閑散としていると感じるのは、この図書館があまりにも広過ぎるからだ。入口だけでも七箇所存在して、貸し出し返却カウンターに至っては、十二もあり、さらに拡大が続けている。

今週のユームたちの担当カウンターは図書館の奥まった位置にある。付近にある書架も、どちらかといえば専門的な内容の本が多く、あまり人気はない。

こんな所にやってくるのは、それこそ明確な目的を持って本を探しに来る者か。

「コノせんせーっ！ ユームせんせーっ！」

とたとたと、軽やかに駆け寄ってくる小さな足音がある。探検好きで元気な子供たちだ。

「子供にはもてるのにな」

肩をすくめてみせると、ユームも苦笑を返してきた。

「ねえねえ、この本ねえ……」

子供の声をぼんやりと聞きながら、少女は微笑んだ。

しばしの忙しい時間が始まる。

船に乗っていた。

天気の良い日だった。

だからコノは甲板に出て、つばの広い麦わら帽子を深く被り、風を受けていた。

ゼロードは世界の中心にある都市の名だが、それは大洋の中心の小さな四つの諸島にあって、その周りには何も無い。四方八方どこを見渡しても何も見えない、ただ、どこまでも青い水平線が見えるだけだった。

だから、この島から、現在世界に存在するゼロードを除いた他の十二の 十数年前までは十三だった 都市へ行くには、必ず船に乗らなければならなかった。

以前はワルタットやラクラトリユアで開発された航空機を利用して、約二〇年ほど昔の、竜顎事件をきっかけに、航空機の運用は縮小され、現在では超音速機が一部の上流階級の間で使われるのみとなっていた。

島から出るには 。

「よお、嬢ちゃん。調子はどうだ？」

親しげに掛けてくる声にコノは振り向くと、顔に満面の笑みをたたえた筋骨隆々の大男が立っていた。

「ガンゼスさん」

コノも微笑を返した。

彼は、今回の出張で、荷物もちのために雇った、冒険者の一人だ。
コノが雇ったわけではない。雇ったのはコノの所属する、ゼロー
ド市立総合図書館だ。

「ええ。快調です。ガンゼスさんも元気そうですね」
「おう！」

ガンゼスは心地よい笑みを返してきた。

「他の方は？」

雇ったのはガンゼスを含めて四人。
急に決まった出張だった。

ゼロード市から外に出るのは、仕事では初めてだった。

「ああ、奴らか？ 情けねーよな？ 船室でくたばってるよ」

今は晴れているが、昨夜までは嵐の中を突っ切って来たのだ。船酔い。天気がよく、風の気持ちいい日だったが、コノとガンゼス以外には船員の姿がちらほら見えるだけで、客の姿はどこにもない。セデイス号は、ゼロードでも有数の巨大客船で、客も五〇〇名まで乗船可能。観光シーズンではないので客は少なめだが、これでも二〇〇人以上は乗船しているはずなのだ。

「仕方ないですよね。あの嵐ですもの」
「……まあ、な」

コノの言葉にガンゼスはうなずくが、少しその表情に迷いのようなものが読み取れて、コノは首を傾げた。

「……なにか？」

たずねると、ガンゼスは少し迷ったように口を小さくまごっこさせた。だが、すぐに意を決したのか、やや冗談めかして言った。

「いやな。本気でそう思ってるのかな、って」

「え？」

問い掛けると、ガンゼスは冗談めかしたように、笑っていった。

「お嬢ちゃん。あんた、本心見せないだろう？」

「そんなことはありませんよ」

即答した。

「そうか？ ま、いつか。あんたが言うんなら、そうなんだろう。だが………うむ。まあ、じゃあな」

全く納得していない調子でガンゼスは後ろ手に手を振って、船室へと降りていった。

コノはしばらくその様子を見送って、一つ、深く溜息をついた。

ガンゼスは怒ったのだろうか？ 嘘をついていると思われたのだろうか？

「ほんとに、隠してるわけじゃないんだけど………」

ただ、見ようとしていないだけなのだ。

誰の心も。

見たくなかっただけだ。

きつと、コノ自身はそう思っている。

思い込んでいるだけかも。
心に触れる。

誰かの、心に触れる。

それが、堪らなく嫌だった。

コノ自身は自分の心の発信についてはひどくオープンな方だと思っ
っている。

「ただ、受信が苦手なのよね」

ぼんやりとつぶやいて、遠くを見る。水平線。青の彼方を。

子供たちには、すぐに好かれる。けれども、一定の、ある程度年
を取った人間との付き合いが、コノはどうにも苦手だった。

ふと、首をかしげたりする。

「老人には好かれるわよね？」

人間、年を取ると子供に戻るといっなのは本当なのかもしれない。

甲板に設けられたビーチパラソルの下で、リクライニングチェア
に身を委ねる。

嵐の時は、このパラソルもチェアも船内に納められていたはずだ。
いつの間に出されたのだろうか？

出したのは、船員たちに決まっている。嵐の中、休むまもなく働
いて、疲れているはずなのに。

正直、コノも、疲れている。船は夜間もずっと揺れ続けていたし、
寝ているだけなのに、体力は奪われていく。チェアに身を委ねてい
ると、すぐに緩やかな眠気が侵食してきた。

そのまま目を閉じ、ゆっくりとまどろみの中に沈もうとして、コ
ノはふと、自分を見続けるいくつかの視線に気づいた。

目を開けると何人かの船員が、仕事の傍らコノを見ていることに
気づいた。

船員たちは甲板を忙しなく動き回り、仕事をし続けている。この場でコノが休むのは 休んでいる姿を見せるのは、客の権利とはいえ、少々気の毒だろうか？

甲板だと直射日光が怖い。ビーチパラソルはかなり大き目なもので、その影はコノの全身を包んでも十二分に余りあり、しっかりと紫外線の攻撃から防いでいるのだけでも。

船室に移動して寝ようかな、とぼんやり考えて、コノは体を半分起こす。

「ああ、いいですよ。そのまま寝ていてください」
「え？」

起き上がろうとした瞬間に、甲板を掃除していた一人の船員に止められた。

「せっかく出したんですから。使っていたかなくては甲斐がありません」

ビーチパラソルを差しながらどこか得意げに言う船員の言葉に、なるほど、とうなずいた。

そんなものかもしれない。ならば、言葉に甘えて、この場でんびりと寝ても良いのだろうか？

じめつとした船室より、潮風といえども風の流れる甲板の方が気分が良い。

コノ自身もこの場に留まっていたい、むしろすぐにも眠りたい、てか移動するの面倒、などという気分にも押されて、まあ、このままで良いか、などと思い始めた。

改めてリクライニングチェアに身を沈めながら、コノは船員に言葉を返した。

「そんなものなの？」

「そうです！ それに……」

「それに？」

いい人だなあ、と思った。

くくくく、
ここまでは。

「それに、ここからだと、スカートの中身が見えます」

につこりと爽やかに言われて、一瞬言葉が返せなかった。

コノが硬直している間に、その船員はさっさとモップを持って、視界から消えていった。

「ば、ばかあああつー！」

いまさら叫んだ所で、後の祭りだった。

準一級司書資格を取って、帰ってきたその日にいきなり言われた。上司の上司であるハイデンスじいさんに。

「コノくんも、そろそろ『担当』を受け持ってもらわなきゃかねえ？」

ゼロード市立図書館に入って、まだ二年に満たない。

普通『担当』は、五年以上勤務した準一級司書以上が受け持つ慣わしだ。

その話が本気だとすれば、異例中の異例というやつだった。

だが、結局じいさんはただばやいただけだったようで、その日はそれ以上話は発展せずに、コノは通常業務へ戻っていった。

その事を同僚で後輩のユームに話してみた。

「うわあ！　すごいじゃないですか！」

「いや、でも、話が出ただけだし……実際には無理なんじゃないかしらっ。」

「ううん。そうでも、話が出ただけでも凄いですよ！　わあ、コノ先輩って、ホントに優秀な人だったんですね」

「あのね、ユーム。『ホントに』って、一体……？」

「気にしないでください。素直な気持ちです」

大いに気になる物言いだったが、考えないことにした。

「うん。ありがとう」

「でも、ホント、『担当』持つと、大変らしいですよ」

「そうらしいわね」

「特に、コノ先輩の場合、『特例』って感じじゃないですか！」

「いや、だからまだなると決まったわけじゃ……」

「いえ。もちろん、仮定の話です」

「そ、そう？」

ユームの物言いというか、ニュアンスにはどうしても納得がいかない。が、いちいち気にしても仕方の無いことなので、さらに無視した。

「きつと、同時期に入社した司書さんたちから嫉妬を浴びるんでしようねえ」

「は、はあ」

「まだ『担当』をもらっていない先輩たちからも、陰険ないぢめを受けるんでしようねえ」

「う、うん……」

「ミムリ工先輩も、裏では執拗ないぢめを受けていたらしいですし」

「そ、そうなの？」

「ええ、大変ですね」

ユームの表情はちつとも大変そうじゃない。

何か、とても楽しそうだった。

「ユーム。何か、怒ってない？」

「いいえ？ コノ先輩。あたしの今の資格、知ってます？」

ユームの表情は笑っている。

「ええと、三級司書……」

首を傾げながら応えた。胸のネームプレートにも、しっかりと三級司書と記されてある。

「言ってますでしたけど、あたし、この前、二級資格、落ちたんですよねえ」

「え？ そ、そうだったの？ でも、焦ることはないわよ。平均、二年掛かるんだし……」

ユームはまだ、就職して一年に満たない。焦ることはないはずだ。

「ええ、ですから焦ってはいないんですけど、半年で二級資格取った人に言われてもですね」

「……」

「一年十ヶ月で準一級資格ですもんねえ？」

「……え、ええと……」

「……怒ってませんよ」

にっこりとユームは微笑む。

「……」

「怒っていませんったらあ」

「……ゴメンナサイ」

なぜか謝ってしまった。

「ええ〜？ どうして謝るんですかあ？」

どじりっつてえの？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0746y/>

夢幻図書館行

2011年10月30日23時21分発行